

# 今こそ読む この1冊

潮木守一

名古屋大学・桜美林大学名誉教授

中嶋嶺雄 著

## 『学歴革命—国際教養大学の挑戦』

(2012年 KKベストセラーズ)

### 就職率を目標としない人材育成

筆者は昨年12月13日、東京京橋の中央公論新社で、中嶋嶺雄学長との対談を予定していた。かねてから目標・意図・体験など、共有する部分が多いと感じていたので、大いに期待していた。ところが当日秋田は猛吹雪のため、飛行機の出発が遅れ、残念ながら対談時間は大幅に短縮してしまった。「国際教養」という校名を使っているが、そもそも「国際教養」とは何か、学生に最低1年間は海外留学を義務付けている狙いはどこにあるのか、ギャップ・イヤー、ギャップ・タームを積極的に推進しているが、その意図はどこにあるのか、聞きたい点が山ほどあった。新設大学は不利と相場が決まっているのに、日本経済新聞によると、経営陣は「人材育成の取り組みで注目する大学」のトップに掲げたと報じられていた。いったいその理由は何なのか、もっと突っ込んで聞きたかった。

時間は限られていたが、いくつかのテーマをめぐって意見交換ができた。そもそも「国際教養」とは何か、そこから入ろうとしたが、中嶋学長にとってはあまりに陳腐な質問なので、それは避けることにした。その代わりに開学わずか8年で、「人材育成の取り組みで注目する大学」の第1位に挙げられたのはなぜか、日本の経営陣は国際教養大学のどこに魅力を感じているのか、そのあたりに狙いを定めて対談を始めた。

新設大学は就職に不利というのは、多くの大学に共通の体験である。それにもかかわらず高い就職率を達成した原因はどこにあったのか、まずそこを切り口してみた。ところが「就職率は目標ではない。海外留学で鍛えてきたサバイバル能力、それを企業が買ってくれた。だいたい4年間で大学を卒業する者は6割程度。ハーバードなみですよ」との説明。長年日本の大手企業が固執してきた、ストレート新卒者優先をはねのけられた理由は、どこにあったのか、それを詳しく聞きたかったが時間がなかった。



### 今後誰にでも必要となる「国際教養」

これほど海外との接点が増えてくると、日本の立場を相手に理解させることは、だんだん難しくなってきた。国際教養という言葉は、おそらく外国人に納得できるように、日本の仕組みを、たくみな比喻を使い、実例を挙げながら、その特徴を説明する能力のことなのだろう。

かつて猪木武徳氏の書いた「大学の反省」を紹介したが、そこでも「国際教養」が強調されていた。しかしこうした能力は、一部のトップクラスの人達に任せておけば済むことで、すべての日本人に必要ではないのではないかという疑問を投じておいた。ところが今では、多くの日本人がそうしなければ、相手を納得させられない場面が増えた。それも単に珍しい文化として日本文化を紹介するのではなく、相互の利害対立、自己防衛のためにも、自分の立場を説得しなければならなくなった。

### 継続的な変化と挑戦が求められる

国際教養大学の図書館は一年365日開館している。今から20年ほど前、国家公務員完全2日休暇制が導入される時、筆者はあえて土日休日開館制度を取り入れた。中嶋学長は「コンビニが24時間開いているのに、どうして大学図書館が開けられないのか」と県担当者と交渉したというが、その交渉も容易ではなかったことだろう。ところがどうか。今では土日休日開館は当たり前になった。お陰様でこちらがその恩恵を受ける立場になった。なかなか世の中は変化しないが、少しずつ確実にこちらの目指す方向に変化してゆく。もっともっと話したいテーマがあったが、対談後わずか2カ月で中嶋学長は急逝してしまった。古代中国には「創業は易し。されど成業は難し」という言葉がある。果たして中嶋学長を失った国際教養大学が「業を成す」ことができるかどうか課題となった。